# 會員通信

## 環境アセスメント雑感

森田弘彦

いわゆる「環境アセスメント」についての論議が、最近盛んにおこなわれるようになった。八月に札幌で開かれた全国自然保護大会でもとりあげられ、「現状では開発による自然破壊の隠れみのとして使われている」という結論になった。一方、開発側はアセスメント法制化に対し、住民参加と費用の負担の面で抵抗があるようである。

苫小牧東部開発に関する環境保全（一般的に苫東アセスメントと呼ばれている）についてアセスメントの中味をみると、次のようである。

まず、一定地域に一定の開発計画をたてる。地域の自然の現況が調査され、開発による各種汚染物質の排出量が推定される。推定排出量に基づいて、拡散式などを用いた汚染予測がなされる。土地利用（工場配置）のためによほど貴重な動植物がない限り、自然環境をつぶしてしまう。汚染予測は国の定めた環境基準以下になるので、公害による自然破壊は起こり得ない。したがって、開発計画は実行可能となる。

ここで現在、環境アセスメントとされているものが、本当に自然保護に役立つものとなるためには、少なくとも次の四つの点に留意する必要があろう。

第一に、自然の現況を把握する場合に、どこまで徹底的に調査するかという点である。生物相の調査に関しては苫東アセスメントが極めて不備であることが指摘されたが、行政側は「これは純粋科学研究ではないので、その程度の不備は問題にならない」としている。この考えは自然保護の発想とは逆転している。すなわち、その地域の生物相を可能な限り量と質にわたって調査しておくことは、自然の現状を変更すべきかどうかの重要な判断材料のひとつであると同時に、将来、自然が変っているかどうかを検討するために欠かせない資料である。もちろん、現在の生物学には限界があって、こうした調査研究を十分におこない得る体勢にないという点も大問題であろう。

第二に、生物の分布や種を調査しただけでは、「自然を把握した」とはいえない点である。どういう形になれば「自然を把握した」といえるのかという問題に回答は出せないが、現在アセスメントといわれているものの中には、次の点が欠落している。まず、その地域の生物的自然の存在を支えている各種の要因を明らかにすることで、これを欠くと自然の復元などの展望が、まったくたてられなくなる。

次に、その地域の自然が歴史的に人間生活とどういう係わり合いを持っていたか、という自然史的な観点からの検討を加えることである。この係わり合いは、農林水産業等生産だけでなく、山菜取り、キノコ狩り、ハイキングなどでの係わり合いも重視する必要がある。このことは、環境権の確立につながるものであり、具体的には最近、自然保護団体から提唱された入浜権を発展させることにもつながる。

第三に、貴重な動植物しか保護の対象としない、という問題である。苫東や石狩湾新湾のアセスメントでは、砂丘植物群やハマナスの保護策として「移植」という方法が、いとも簡単に出てくる。前記のように現状の自然を歴史的に把えるならば、このような非常識な結論は出てこないはずである。本州の歴史ある地域では里山や寺社林が学術的な貴重性はなくとも、災害時の避難場所や生活上の必要物資を得るために、地域住民の共有財産として守られてきた。北海道では植民地的な開拓の結果として本州のような風土はないが、そろそろこうした考え方を深めないと、北海道の自然破壊を食いとめることはできないであろう。

第四に、環境汚染の問題をすべて環境基準に置きかえていることである。たとえば「拡散計算による亜硫酸ガス濃度は環境基準以下である。したがって大気汚染による影響はない」という論法は、すべてのアセスメントに共通している。「環境基準」は動植物、生態系に影響を与えないことを保証した数値ではなく、汚染の進んだ地域で「とりあえずここまで減らそう」という努力目標にすぎない。現実に、大気汚染が環境基準値以下であっても動植物に悪影響があらわれることは実験的にも、実証的にも数多くの実例がある。したがって環境汚染が自然環境や人間生活に及ぼす影響については、予測値が環境基準以下であっても、詳細な検討や実験をおこなわない限り「影響なし」と断言してはいけない。

開発側（行政側）が「環境基準＝安全限界」というごまかしの論理を捨てない限り、

自然保護関係者や住民の「環境アセスメント不信」をぬぐい去ることはできないであろう。

以上、環境アセスメントについて日頃考えている点を要約してみたが、問題点はさらに多岐多様にわたっているはずである。自然保護の立場に立つ人がこうした点についてくり返し議論をおこなって、「環境アセスメントが自然破壊の突破口」である現実を是正していかなければならないと思う。

（農林省農業試験場北海道支場）

## 自然保護協会に入って

**松本一和**

自然保護協会に入会して、足かけ二年。僕が自然保護に目を向けたのは、中三の頃でした。元来の動物好きが影響してか、自然環境には、とくに関心を持ちました。その一段落が中三の時の弁論大会でした。いま思えば、少し極端だと思いますが、次のようなことです。

㈠「食べないのなら殺すな」

㈡「自然に滅ぶ物を保護することは、それがどんなに貴重な物でも自然破壊である」

㈢「生者必衰、人類は滅びる前に後始末を」

㈣「捨てるのはいい、しかしそれは土に戻るか？　土に戻らない物を作るのはよそう、買うのはよそう」

㈤「宇宙を見るより、地球を見なおせ」

極端ではありますが、ピントは外していないと思います。しかし、二番目のものは、現在あてはまらないと思われます。なぜなら現在、ほとんどの生物は、なんらかの形で人間の影響を受けているからです。ですから、その人間の影響を受けた物を保護していくのは、当然かつ義務であると思います。すべての人が、大自然の中での人類というものを再確認し、その中で発展の道というものを見いだしていくべきだと思います。

少し前ですが、大規模林業圏開発計画に反対しよう！という、自然保護団体連合のパンフレットを見た時、その中に自然保護とは「人間保護」のことです。という文を見て、なるほどと思うと同時に、開発中心主義の人達には、この意味が理解できないのかと思いました。

自然保護活動をもっと盛んにするには、地域住民の理解と知識、かつ協力が必要です。そのためにも、もっとも広範囲の広報活動が必要だと思います。僕がこの協会の存在を知ったのは、新聞のほんの片すみでした。僕のクラスメイト達は、この協会の存在すら知らず、自然保護にはあまり関心を持っていないようです。自然保護は、大人・小人に関係ないと思います。たとえ考える水準は違ったとしても、ですから、機会があれば自分なりに、皆によびかけようと思っています。

ごらんのように、高一にしてはあまりにも無知でありますが、これからは会員の皆さんとの交流を積極的に行なっていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

（長沼在住）

## クマ牧場と雑誌「ヒグマ」

**加納菜穂子**

野生の動物をある特定の者が、特定の目的で所有するということはおかしいと思い、人間が自然を管理するということを楽観的に考えることもひどく恐ろしいと時に思いつつ、クマ牧場で飼育係兼学芸員兼研究員といった生活をはじめて、もうすぐ二年になります。

自分の仕事になんらかの意義づけをして日々の活力とする勝手さでいうと、動物と人間のかかわり方が、現代の都会ではペットと、スーパーマーケットのパックされた肉片のあの異様な、どうしてもおかしいと思わずにいられない、ぎまんに満ちた関係が、私が毎日生きていくのにどうしても、がまんならぬ切実なるもの由、その接点のど真中に身を曝して、しかと見つづけて、なんとかしたいという欲求がクマ牧場に私を引きつけております。

現在ヒグマは野生といわれる存在が一方にあり、かつ人間とのかかわりから免れ得ない方向に向いつつある、つまり家畜化の道を歩みはじめた、同一種の動物でありながら、両極に二分化された存在になりつつあります。これは、ひょっとするとひどく危険な方向へとどんどんいってしまう可能性を孕んだ、人類史上、ヒグマ史上、はじめてのヒグマの家畜化の一歩が踏み出されているのかもしれないという、私にとっては、きわめて放っておけない重大な進行過程です。

それにしても、やはり現在のクマ牧場はヒグマにとっては監獄のようであり、何やらヒットラー時代の人体実験のイメージか

ら解放されぬ由、少なくとも、ヒグマにとって、そしてヒグマと人間とのかかわりにとって、いまよりは良くなるための実験の場とせねばならず、すべて知りたい人々には知ることができるようにしておかねばならず、そういった、きわめて勝手な意義づけをし存在の合理化をし、それゆえ、雑誌「ヒグマ」を創刊したいと思い、現在三号目の編集にとりかかっています。

（のぼりべつクマ牧場）

## 理事選雑感

原田輝治

去る一月のある日、理事の小川　巌さんから協会理事選の選挙管理委員を依頼する電話を受けました。依頼の理由は、私の職場が植物園からきわめて近いということと、私のヤジ馬根性を見越してのことらしい。どのような選挙でも、開票状況を見るのは興味をひかれるものです。

協会の会員数は六〇〇名以上ですが、投票数は約二〇〇名。三名連記ですから、投票総数は約六〇〇票になります。この程度の開票なら造作もないこととフタを開いたところ、なんと票を投じられた氏名は一四七名にも及びました。氏名が読みあげられるたびに、大机いっぱいに広げられた投票記録用紙の中からその人の名を探すのです。そして票を加えたり、あるいは新たに名前を書き加えたりするのですから、さながらカルタとりか神経衰弱の様を呈したことは容易に想像されましょう。

理事選の結果は別掲されるでしょうから詳述しませんが、五票以下で、いわゆる死票になった人が一二五名という数字を見て自然保護協会の現状が非常によく現われているような気がしました。会員が全国に分散していることもあるでしょうが、会員相互に知り合う場が少ない状態で選挙をおこなった場合、こうした結果となるのは必然であると思います。理事選が会員の選挙によるのは協会の過去の経験をふまえて生まれた制度ですから、それはそれで良いと思います。しかし、選挙の前提となる会員同志の交流の場を、さらに拡大できないものでしょうか。

昨年は、自然保護講座など新しいすぐれた企画が持たれました。また、会誌の「湿原・特集」も時宜に適した自然保護協会ならではと感じさせられる内容で、私個人としても非常に役立っています。そのようなすぐれた企画も、その大半が理事会だけで運営されているところに、現在の協会の弱点があるといえましょう。頭が働いていても手足が動かない組織は、十分な運動を展開できないものです。そこで、次のような提案をしたいと思います。理事会は方針を決定する。その運営は事務局員があたる。事務局員は特に人数を制限せず、可能な限り多くの人が協会運営に参加し得る形態にしてはいかがでしょうか。

多忙ななかで協会を運営されている理事には、本当に感謝いたします。さらに、会員が協会を身近な存在と感じ得る自然保護協会にするために、なんらかの方策を講じていただきたいと思います。まとまりのない文になりましたが、ふと、そのようなことを考えさせられる、今回の理事選ではありました。

（北海道生活環境部自然保護課）

## 札幌山歩会のこと

岩垂　悟

およそ五十年ばかり前のこと、大正時代から昭和初期にかけて、私は札幌で学生時代を過しました。そのとき友人に恵まれて、夏冬を問わず山を歩きました。また、植物学教室で学ぶようになってからは、採集も兼ねて山野を歩き廻りました。

やがて満州勤務で山とは縁遠くなり、引揚げ後は生活に追いまくられて、山どころではありませんでした。

しかし、忘れてしまったわけではありません。ようやく職務から開放されて、札幌で自適することになりました。次第に落ちついてくると、山よ、もう一度という思いが湧いてくるのでした。そんな折りに紹介されたのが山歩会でした。すでに古稀の齢となっていたので、直行さんに会ったときにそのことを話したら〝むかし山登りをやった奴は、歩き方をおぼえているから大丈夫〟と元気づけられました。おかげで、山歩会の人達とともに、山歩きを楽しんでおります。

札幌は西側に連山を擁し、そのほとんどが日帰りで登れるばかりでなく、平野部の森林、原野、海浜などにも美しいものがあふれており、自然に親しむにはまことに恵まれた都市であります。

さて五十年ぶりに歩いてみると、多くの山はほとんど昔と変りなく、登る道も旧道のままであります。靴はクリンカーからビブラムに変りましたが、朽葉を踏む山道に

往時の触感がよみがえってきます。

変り果てたのは手稲山と藻岩山です。美しい山をストリップにした破廉恥。

五剣山が八剣山に昇格していました。友人にそのことを話したら〃戦後のインフレは山までもか〃と苦い顔をしました。戦前古くから五剣山の愛称で親しまれてきた山です。舘脇先生の「札幌近郊豊平川植物」(一九三〇)にも観音岩山(五剣山)として記載されています。五剣山は自然発生的に呼びならされた名でしょう。これに引きかえ八剣山は、戦後、人工的に強制された名前のような感じがします。失礼ですが、私には五剣山であって、八犬伝ではありません。山名にしても、植物名にしても、自然発生的なものに〃なるほど〃と思わせるものがありますね。自然と同様に大切にしたいものです。

今昔話はこれくらいにして、札幌山歩会―ユニークな山の団体―を紹介したいと思います。

会の発足　昭和四十年二月札幌の一主婦(50歳)が、北海道新聞「いずみ」欄で「若い人の山岳会などにはついてゆけない中年以上の者が、男女共々のグループをつくって山野を歩いて、自然に親しみましょう」と呼びかけました。これを読んだ初対面の十四人(♀13、♂1)が、お互いの赤いリボンを目印に集まって札幌山歩会を発足させました。呼びかけた阿部さちさんと、応じて集まった十三人の勇気に対し敬意を表したいと思います。

以降、健全な歩みをつづけ、会員も次第に増え、今年十三年目を迎えました。

会員構成　現在二一七名。平均年令は五十五歳余と高いが、概して健脚、ことに女性に健脚家がそろっています。会員の八割が女性ですから、男性は本会の稀少価値的存在であることも面白いと思います。

発足当時の人々が健在で活動しているばかりでなく、自然を愛する人たちの集まりですから、山を汚さず、草木を傷めずというルールは自ら養われており、よい雰囲気の集団であります。

山野行　山歩会の主な行事は、一緒に山野を歩くことと、会誌「峠路」の編集であります。シーズンは春三月にはじまり、十一月中旬に納会で、冬期は休みます。

月に四、五回の割で出かけます。うち年一、二回は一泊で大雪山やニセコ方面などに遠出しますが、その他は日帰りで、主に札幌周辺のコースを歩きます。ウィークデーを主体に行いますが、毎回五十人ほど参加します。ちなみに、昨年は四十三回で、延一、八四〇人でした。

毎月委員会を開き、前月の報告と反省を行い、来月の予定を樹てます。予定表は印刷して郵送されますので、会員は自己の体力など勘案して、適当なところに参加することができます。

山歩会レギュラーコース(日帰りの部)

忍路竜ケ岬、塩谷丸山、小樽赤岩山、奥沢水源池―穴滝―遠藤山方面、銭函峠―春香山、銭函天狗山、手稲山、藻岩山、円山、幌見峠―盤溪方面、砥石山、八剣山、神威岳、定山溪天狗山、無意根山、中山峠―豊平峡、札幌岳、空沼岳、恵庭岳、シシャモナイ―樽前山、紋別岳、藤の沢小鳥の村、鱒見滝―厚別滝、白旗山―西岡水源池、野幌森林、石狩浜、厚田―濃昼、岩見沢利根別自然休養林、ウトナイ湖の白鳥など。

会誌「峠路」　会員が交互に執筆した行事の紀行文を主体に編集、年一回発行。会員にとっては、山あるきと同等に楽しみな読み物です。なお、一般の人々も札樽周辺の自然探訪のよき参考となりましょう。

植物のこと　歩くことは得意ですが、植物を知っている人が意外に少ないのです。関心がないのではなく、チャンスがなかったのでしょう。多くの人から〃植物を知っていたら、山歩きがどんなにか楽しくなることでしょう〃という言葉を聞きます。

私は名前のわからない植物は持ち帰って植物園や林業試験場で教えてもらうことにしています。コースで目にふれる主な植物の和名は、会として知っておきたいものです。やがて会の中から、いわゆる植物博士が輩出することを期待致しましょう。

(札幌山歩会)

## 自然と私

**小野寺　敬子**

野鳥を観察して約一年、こんなに自分でもいわゆる〃鳥キチ〃になろうとは夢にも思いませんでした。私の住んでいるところは札幌の宮の森で、場所がらから野鳥が訪れ、母がバード・テーブルを設置し餌付をはじめていました。

そのころの私は、母が「今日は○○の鳥がきてね……」というのを聞き「アア、そう」と一言いうだけで全然関心がなく、「フンフン」と返事をするばかりでした。

休みの日は何をしているのかといえば、もっぱら一週間の疲れをとるのは寝るのが一番といって睡眠をむさぼり、あとはおもむろに、ない知性と教養を高める(?)ために本ばかり読んでいました。

母はなんとかこんなにまわりの環境のよいところなのにと、あの手この手で私を外に連れ出そうとするのですが、私は庭つづきの居間の端に腰掛け、足だけ外に出すというのがせいぜいでした。いま考えると、あの貴重な日々を……と大変悔やまれてなりません。

直接観察をはじめるきっかけというのは家によくおみえになっていた鳥獣保護員の方に勧められて、昨年の一月に藤の沢小鳥の村での探鳥会に参加したのが初めてでした。その時きていた鳥は、わが家にくる鳥とほぼ同じ種類のものだったのですが、野鳥の好きな方々ばかりで、老若男女を問わず、村長さんを中心に和気あいあいとした雰囲気がとても暖かく感じられました。

それから徐々に行きはじめ病みつきとなり、いままでは仕事中心の私であったのが仕事をしているのは私の仮りの姿であり、探鳥をしている時の自分が本当の私だと変わってしまいました。

幸い私のまわりにはプロ顔負けの先生方がたくさんいらして、いつも一緒に連れていって下さり、教えていただけたことはとてもラッキーでした。何もわからない私を本当に手とり足とりお世話をして下さり、重たいプロミナを担いで行って鳥を探して見せてくれて、私が「見えない」と騒ぐと「どれどれ」といってまたのぞいて探り出して下さり、本当に頭の下がる思いです。初めて野幌へ行った時はその自然林の見事さに心を打たれ、絶対新婚旅行はここにしようと固く固く心に誓ったものでした。

雪が積もり、しんしんとした森の中で見た「ウソ」の図鑑通りの信じられない美しさ、初めて出合った念願の「クマゲラ」の雄々しさ、富良野の演習林で皆で覚えた「ミソサザイ」、ウトナイでの「白鳥」の華麗さ、その口ばしが黄色と黒のペンキをぬったようでびっくりしたことなどと、もう思い出はつきません。

毎日毎日おそいくる残業で精神的に辛かった時も休みを待って山へ行き、身心ともにいやされたこともいくたびか……私にとって自然に親しむということは、もう正に野鳥に導かれてのそれであり、その醍醐味を一度覚えてしまったいまとなっては、生涯切り離せないものとなってしまいました。特に私は本州の都市で育ったせいか、北海道の雄大な自然の中に調和された動植物が神秘なほどに感じられるのです。

朝早く起きることが何よりも苦痛で、心の中での葛藤をくり返しつつ今年はどんな鳥にめぐり会えるか、それを楽しみにまたどんどん歩こうと考えている昨今です。

（三井物産株式会社）

# 北海道に来てみて

三木　昇

天北線・浜頓別から次の急行停車駅、鬼志別までのおよそ三十分間、車窓からの広びろとした眺めは、本州から来た私にとって随分と北海道的なものに映った。

浜頓別からクッチャロ湖をはじめとするいくつかの沼、鉄道に沿ってつづく防雪林、広い原野と無人駅、トドマツやエゾマツの森、海までつづく牧草地湿原と、その中のハンノキやアカエゾマツ、古いキタキツネの穴……北海道の人にはくどいと思うが列記してみたい。それら茫漠とまでいかないまでも、オホーツクの海に沿って広がる木のない風景は、私に自然に恵まれた北海道を感じさせるのに充分なものであった。

最近、北海道にやってきた私である。上陸した頃は、ただその広さに充分に自然が残っているということを感じていた。ところがどうも、自然は原形をとどめているのではないということが、次第にわかってきた。

山については、しばらく暮すなかでそんなに畝をとっていない人の話を聞くと直径が七―八〇センチもある木がたくさんあって、それらはみな伐られてしまい、いま見ている山々は急速に姿を変えたというのである。

山の中に入ってみると、その話にある昔の大きな木の名残りをあちこちに見ることができた。たとえば、尾根近くに残る伐り倒しはしたものの、大きすぎて搬出できずに残され腐ってしまった木、鉞の傷のある大きなミズナラの伐根などである。これらのものを見ていくうちに、すっかり伐りつくされてしまったという北海道の山を感じてきた。

さて、また最初に書き出したオホーツクに沿って広がる広びろとした風景―それは本州人のイメージとする北海道的風景だと思うこと―に話を戻してみる。ここでも、私は誤りを侵してしまった。

山軽（ヤマガル）という駅が、天北線にある。少し詳しくお話すれば、旭川から汽車で約四時間、いままで山の中を走っていた線路が浜頓別にいたり、そこから鬼志別まで海岸線に平行に走る。山軽の駅は、この浜頓別の次の駅にあたり、そしてここは、ちょうど白鳥の渡りの中継地であるクッチャロ湖の大沼と小沼の間にあたるところになっている。

浜頓別から汽車はクッチャロ湖のすぐそばを通り、ドイットウヒやトドマツなどの防雪林の間に、湖をところどころに見ながら駅にいたる。比較的立派な駅舎であるが、かなり前から無人駅になっていて、開け放された戸や毀れた事務椅子などが淋しく目に映ります。この駅のひっそりとしたさまを伝えたいと思うが、筆が及ばず残念である。さて、この駅には驚くべき歴史があった。それを偶然、この地方の山林を最後に伐り荒したグループのひとりから聞くことができた。

山軽は、いまでこそ無人駅になっているけれども昔は木材の集積地であり、ここから盛んに木材の貨車積みが行なわれていた。戦前のいつ頃かわからないけれども、このいま何もないところに遊郭があり、隣の浜頓別のそれよりも娼妓の数が十人ばかり多かったというような、木材景気にわいた場所だったというのである。そのまわりにも相当大きな木があったが、みな伐ってしまったということであった。それは、とても想像できるものではない。駅の外には広い原っぱと湿原、そしてさして大きくもない木が木立をなし、その中に昔、人間が住んでいたしるしとして、コンクリートと鉄でできたものがわずかに残り、あとはすっかり朽ちてあとかたもない。

昔から第一、第二次産品が収奪されつづけてきた北海道は、いつも仮設の街がそこに現われ、木材や砂金があるあいだは殷賑を極め、それがなくなってしまうとあとかたもなく街は消えた。仮設の街ゆえに、わずかの時間に朽ちはてる。注意深く歩きまわらなければ、その昔の姿を頭の中に再現することはむずかしい。こうしたことから、とかく目の前にある自然というものを認識するとき大きく作用した人為的要素を抜きにして、勝手に組立てることが多いのではないだろうか。

三十分間の風景は、大森林だったという話から、いま広びろとしたこの地方の風景は本来的な北海道の姿というかってな先入観をとりはらって、この風景をそこにのこる断片的な風景をもとに考えてみた。車窓に広がるなだらかな丘陵は木がなかったのではなく、エゾマツやトドマツの針葉樹とその中にダケカンバやミズナラが混交して森林をつくっていたのだろう。

それをすっかり伐りつくし焼き払い根を起こして、牧草地にしていったと考えられる。湿原は、本数こそ多くないにしても、アカエゾマツやハルニレ、ヤチダモの大木が散在する森林だと思われる。それを伐りつくし、排水溝や暗渠により乾燥させてゆき、しだいに牧草地化していったものだろう。ササ地や湿原は、ただ伐っただけでなにもしなかった場所かもしれない。

このようにしてわずか数年の間に北海道の山も広い原野も自然そのものという、私のイメージは崩されてしまった。自然の宝庫だという本州人の思う北海道も、変だなと気づいてよほど注意深く見ていかないとその本来の姿を正しくつかむことはむずかしい。破壊されたものが破壊に映らないという恐ろしさには充分気をつけたいし、いま書いたような昔話をとどめることでこの北海道の自然を考え、気づいた人がふえればと思う今日このごろである。

（在・札幌市）

## 山の風物誌

### ――伊藤秀五郎先生の詩集――

辻　井　達　一

一九七六年の春早く、というより二月の寒さの最も厳しい頃、私たちは伊藤先生を失った。私にとっては自然保護協会の会長としてというよりも自然そのものについての師であり、山の先達であった人を失ったという思いが強かった。

その前年、つまり一九七五年の春三月に、当時、東京築地の国立がんセンターにご入院中だった先生からお便りを戴いたことがある。それには数篇の詩と、いつか詩集を出したいものだということが書かれていた。

この会誌十六号に伊藤先生の続・北の山について八木教授の文が載せられているが、その原稿を拝見していてふと思い出したのがその手紙である。そこには、森林の持つ人間学的意味、心理学的意義などについていままで森林学者から聞くことがなかった、と手厳しい言葉が述べられたりしていたが、次いで「僕の印象では、石屋さんの八木先生は詩の分かる人のような気がする」と結んであった。

〃続・北の山〃と〃山の風物詩〃が相次いで出版されたときに、八木教授が一文を寄せて下さったのは全くふさわしいことだったと思う。

伊藤先生の所へはそのあと、小川　巌君とお見舞に行ったことがある。そのとき、小川君が「こういう本もたまにはいいんじゃないかなあ」といって持って行ったのが竹田津さんのキタキツネの本だった。伊藤先生の最後の詩は「草原の生きものたち」と名づけられている。

（北大助教授・会誌編集委員）